はくぶつかん

HIRATSUKA CITY MUSEUM 平塚市博物館

VOL 4 NO 7 1979 11 1

TNO 43

１１月の花

シロダモ

ミズキ、ムクノキと鳥の好む実をつける木を紹介してきましたが、１１月頃実が赤く熟すシロダモもその一つです。実がかなり大きいので、特にヒヨドリがよく食べに来ます。

シロダモで不思議なのは実の熟すのと同時に、枝先には黄色い花をつけることです。

つまり、花から実になるのに丸一年の時間がかかるのです。鳥に実を与え、たねを遠くに運んでもらうには、虫の少ない冬に熟した方がよい、そこまで考えているわけではないでしょうが……。

１２月の行事

○体験学習シリーズNo38
おかざりを作ろう。

日時　１２月１６日（日）　１０時～３時

場所　博物館１階科学教室

内容　正月に玄関や神棚などにかざるワラのオカザリを作る。

申し込み　往復ハガキで１２月４日まで。定員３０名。多数の場合は抽選。

○自然観察会

冬の自然をたずねて（震生湖）

日時　１２月２３日（日）雨天中止。９時～４時

場所　秦野市震生湖付近

テーマ　生物の冬越し・地質。

申し込み　１２月１０日までに往復ハガキで定員３０名　多数の場合は抽選

◯星を見る会

「太陽黒点を調べよう」

日時　１２月９日（日）　１１時３０分～１時

場所　博物館屋場

内容　太陽黒点のスケッチを行って、くわしく調べます。

申し込み　往復ハガキで１１月３０日まで。定員３０名。多数の場合は抽選。

１１月の行事

◯自然観察会

日時　１１月２５日（日）

場所　秦野市弘法山周辺

◯体験学習シリーズ№３７
「原色ドライフラワを作ろう」

日時　１１月２５日（日）

◯プラネタリウム案内

観覧料　１人　１００円

所要時間　１回　４５分

観覧券の発売開始時刻と投影開始時刻

投影日		発売開始時刻	投影開始時刻
土曜日	１回目	１２：００	１３：４０
	２回目	１４：００	１５：００
日曜日	１回目	９：００	１０：３０
	２回目	１２：００	１３：３０
水・木	団体専用		

定員　１２８人

観覧券は、１人、１回、１枚しか発売しませんのでご注意ください。

乳幼児はご遠慮ください。

◯プラネタリウム話題

１２月　縄文人の見た星座

１月　星の地図

２月　日食とコロナ

３月　ブラックホール

◯星を見る会

「秋の星雲・星団を見よう」

日時　１１月１７日

◯出版物販売のお知らせ

今、博物館では、５３年度に出版された調査報告書類のなかから、下記の出版物について、１階受付案内のところで発売いたしております。

博物館資料№１７　平塚市須賀の民俗　定価1,５００円

博物館資料№２０　家と村Ⅱ－平塚市広川－　定価　２００円

どうぞ、ご利用ください。

◯博物館資料の寄贈・寄託案内

博物館では、博物館資料の寄贈・寄託を受付けております。資料の提供をお考えの方は、一度博物館へご相談ください。

お問い合せは下記へ

平塚市博物館　平塚市浅間町１２－４１

ＴＥＬ　３３－５１１１（代表）

漁撈の伝統

→ 2階展示室<24 海と生活>を見て下さい。

●浜の生活

旧須賀村や平塚新宿は、今では昔の面影がすっかりうすれてしまいましたが、古くからの漁村でした。須賀には１６世紀の中頃に漁をしていたことを示す古文書（須賀・尼屋文書）が残されており、少なくとも４００年以上、永々と漁業が続けられてきたことがわかります。残念ながらその当時、どのような漁が行われていたか具体的にわかる資料はありませんが、江戸時代の末以降は下の表のような漁が須賀で行われていたことがわかっています。

表にある漁業を含めて、須賀や新宿などの伝統的な漁撈文化を考えるのに、まず前提として考えておかなければならないのは、平塚の海が砂浜であることです。岸の磯も沖の磯もなく、砂浜が続く海は、三浦半島や真鶴など磯をもつ地域と比較してみると海の様子が違うのがよくわかります。この違いは単に海の自然が違うというだけでなく、海を舞台とする漁業のあり方やそこで暮す人々の生活までも違っているといえるからです。

例えば磯をもつ地域では、船上から一本のヤスでタコやアワビ、磯魚などをとる見突き漁、海へもぐってアワビ、サザエをとる潜水漁法 ― いわゆる海女・海士 ― が発達していますし、ワカメやカジメなどの海藻をとる磯どりには女性が活躍します。これに対し、砂浜の地域では海に根がないのでタコやアワビなどもいないし、海藻もあり

表１漁法と対象魚

漁法	対象魚
大謀網	ブリ
夏大謀	アジ・サバ・カマス
•籠口網	イワシ類・アジ・サバ・カマス・サンマ・現在はカツオ・ソウダガツオ・カンパチ・トビウオ・マダイ・タチウオ・ホウボウ・ウマズラなども入る。
•地曳網	イワシ類・シラス・マアジ・カマス・サバ
ゴロビキ網	イシモチ・スズキ・クロダイ・アジ
イルカ網	イルカ
手繰網	アマダイ・ヒラメ・アカハシエビ・カレイ類・シタベラメ・イシダイ・ホウボウ・エビラメ・クロマト・シロマト・アカダラ・ホンダイ
棒受網	シコイワシ・イワシ（モロ棒受―ムロアジ）
ヘチダ網	シコイワシ・イワシ
アダリ網	イワシ類・コノシロ・ボラ・カツオ・カマス・キワダ
巾着網	イワシ類・コノシロ
タタキ網	コノシロ・イシモチ・カマス・サッパ
流し網	サンマ
カツオ釣	カツオ（ソウダガツオ・メジ）
•小釣	キンメダイ・ムツ・サバ・ゴガツイカ・ヤリイカ
タレナワ	マグロ
延縄釣	シイラ・カツオ
ヒッカケ	エビラメ・シタベラメ
•沖びき網	シラス・サヨリ

• 現在行われている漁

ません。海と女性との係わりも薄く、地曳網をひくのを手伝ったり、とれた魚の処理に係わる程度です。日本の漁村では漁だけをしている村はなく、どこでも一方では農業をする半農半漁ですが、砂浜の漁村では男が漁、女が農といった分業ができあがっていました。

つまり、磯と砂浜の違いは漁法にちがいがあるというだけでなく、女性と海の係わりが大きく異なり、磯の地域では女性の漁業の中で占める位置が大きく、浜の地域に比べてその役割は重く、家族形態や婚姻制度にまで大きく影響を及ぼしている場合もあります。また、磯と浜では当然ながら船も違います。岸の磯をもてば磯の間で漁が行われ、船が磯と接触してもこわれない構造が要求されるのに対し、浜の船は、打ちくだける白波を乗り越えて沖に出られる構造が要求されます。

磯と浜の違いを簡単にあげてみましたが、それぞれ磯の生活、浜の生活と対峙させて考えることもできます。旧須賀村や平塚新宿など平塚の海辺の村々は浜の生活をもつ地域で、このことを抜きにしては平塚の伝統的な漁撈文化を語ることはできません。

●漁の変遷 －須賀の場合－

須賀で行われていた漁法を現在わかっている範囲で表にすると表1のようになります。もちろん先に述べたように須賀の地先には磯がなく、磯漁はありません。

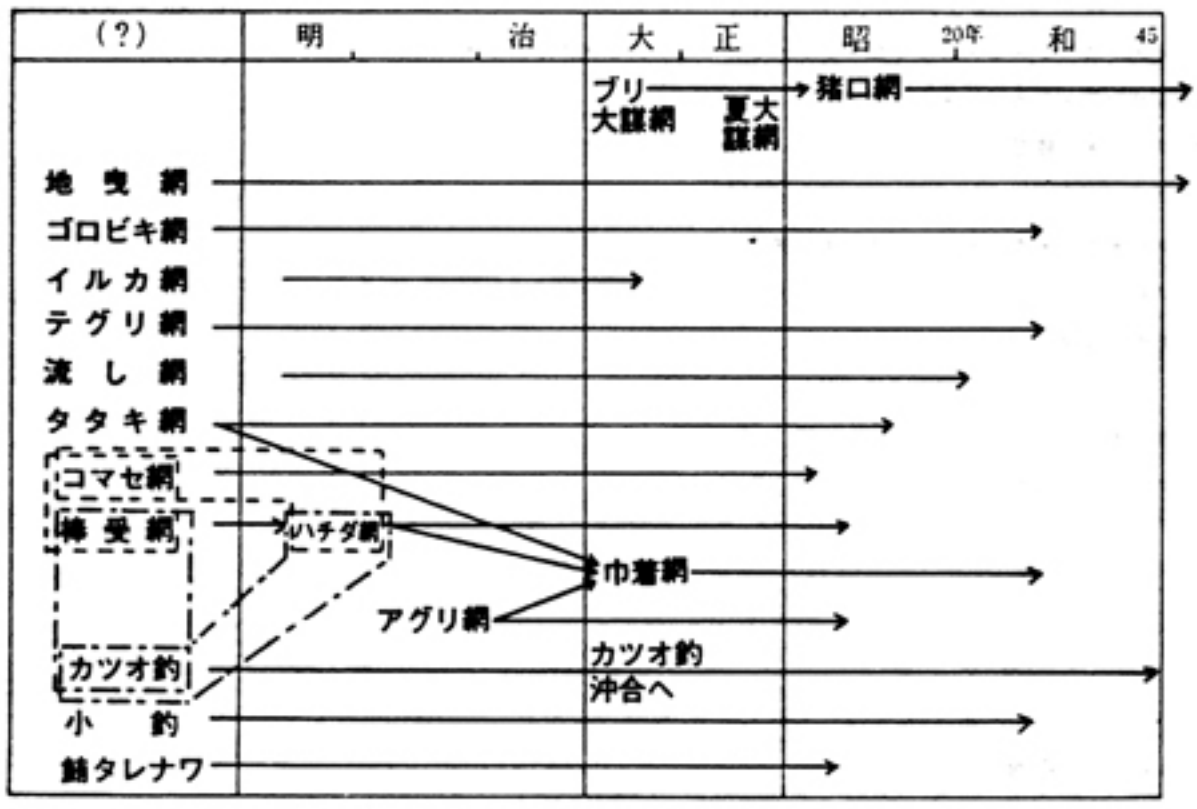
この表にある漁法はおおよそ江戸時代末以降のものですが、表の中には改良や伝播によって変遷している漁法も含んでいます。漁具・漁法は常に改良が加えられ、例えば同じ地曳網でも現在の網は昔のと構造が違ってきていますし、大謀網は大正5年から昭和初期までで、それ以後は代って猪口網をし、現在に到っています。また、棒受網は明治期にハチダ網に改良され、その後大正期には千葉県から巾着網が導入され、アグリ網やタタキ網の一部に代って行われるようにもなりました。

それぞれの漁法についての変遷を図にすると下図のようになります。これはそれぞれの変遷をモデル化したもので、全てがこれと同じに変遷したという単純なものでもありませんし、さらに個々の漁は細部の改良がくりかえされ、一方では他の漁と密接な関連をもって行われているなど、実際は複雑な様相になっています。

下図でわかるように明治以前から行われていたと考えられる漁法は、地曳網・ゴロビキ網・テグリ網・コマセ網の曳網類、棒受網（敷網）、タタキ網（旋網）、カツオ釣、小釣、タレナワの釣漁をあげることができます。

これらについて個々の漁法の関連をいえば、コマセ網でコマセをとり、これを餌にして棒受網をしてシコイワシをとり、さらにこれを餌にカツオ釣をします。そして、一方では棒受網はイワシ漁

漁の変遷



としても行われるといった具合になっていました。

つまり、相互に関連する漁法は個々の漁法が単純に個別に変わっていくというものでなく、他の漁と係わりながら移りかわっていくわけです。例えば、イワシ漁としての棒受網はハチダ網、巾着網と移りかわっていきますが、カツオ釣の餌どり漁としての棒受網は、ハチダ網へと改良されるに止まり、巾着網使用にまでは到りませんでした。

このように須賀の漁法の変遷をみたり、さらに周辺の地域の漁業のあり方と比較してみると、次のようなことが指摘できます。それは、

①漁法個々については一般的な発達史（例えば棒受網からハチダ網への発達など）をたどりながらも、全体としては他の漁と関連して同一の歩調をもって発達するとは限らず、地域内でも漁法・漁具の発達に跛行性がみられること。

②大謀網導入、船の機械化（大正初期、これによってカツオ釣が沖合に出るようになる）といった漁業の近代化以前は、多種多様な漁が行われ、そこには核となるべき中心的漁法がなかった。しかし、多種多様な漁法といっても海の自然的条件（砂浜であること）に規制され、漁業の近代化以後は近代的漁法（沖合カツオ釣）と自然的立地により適合した漁法（地曳網）が発達したこと。

この２つの点を指摘することができます。

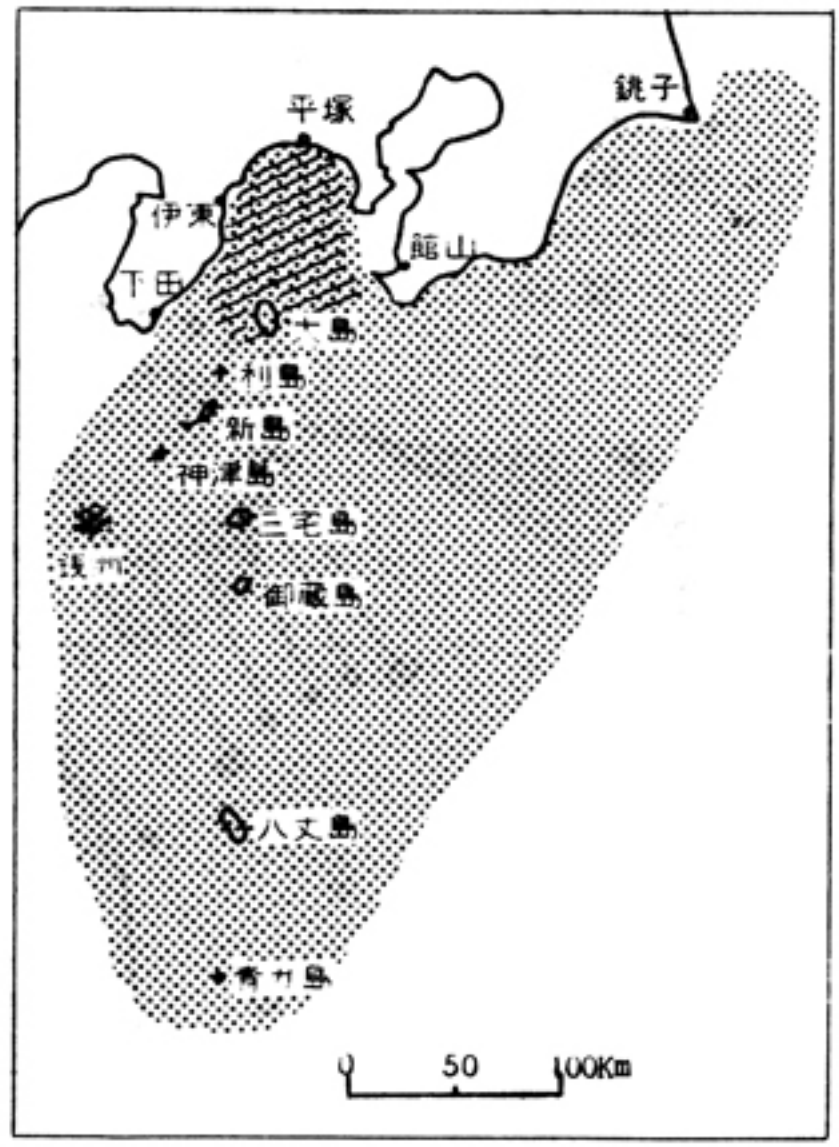
●漁の近代化

須賀における漁の近代化は大正初期から始まる漁船の機械化と大謀網という大資本による漁業の開始によって始まったといえます。

漁船は動力が機械化されるまではオオブネ、チュウブネ、コブネといわれる櫓船で、漁が終るたびに浜にあげるというものでした。ところが大正初期になってカツオの一本釣に焼玉エンジンをつけた船を使い始めたのです。初めての動力船は伊平丸という船で、それ以後、急速に機械化が進んでいったのですが、これによってカツオ釣の漁場が大きく拡大しました。

櫓船の時代のカツオ釣はカツオの回遊を待ってジウミといわれる相模湾内で行われ、遠くても大島付近までででした。これが船の機械化・大型化、と同時に夏期に氷の入手が可能となることによって八丈島付近まで漁に出られるようになり、さらにその後は銚子・勝浦沖、八丈島・青が島付近、鐵洲付近にまでも漁場が拡大していったのです。これにともないカツオのナムラ（群）を追うだけでなく、メジなども一本釣の対象となり、魚種もひろがっていきました。

漁船の機械化は漁場や魚種の拡大をもたらしましたが、それだけでなく須賀の漁業にとっては大きな転換期となりました。機械船以前は、先にも述べたように中心的漁法がなく、多種多様な漁が行われ、一軒の漁家でカツオ釣もするし、地曳網もする。また、ハチダ網や手ぐり網、小釣もするといったように全体として多種多様だけでなく、それぞれの家でも多種多様な漁をしていました。ところが船の機械化が始まると、船を新造する資本が必要、また機械化すればカツオ釣の一回の操業が長くなることへの労働組織の対応が必要となってきました。つまり、資本や労働組織への対応がとれる場合は船を機械化してカツオ釣を中心に



//// 櫓船時代のカツオ釣の漁場

⁘ 機械船のカツオ釣の漁場（大正初期以降）

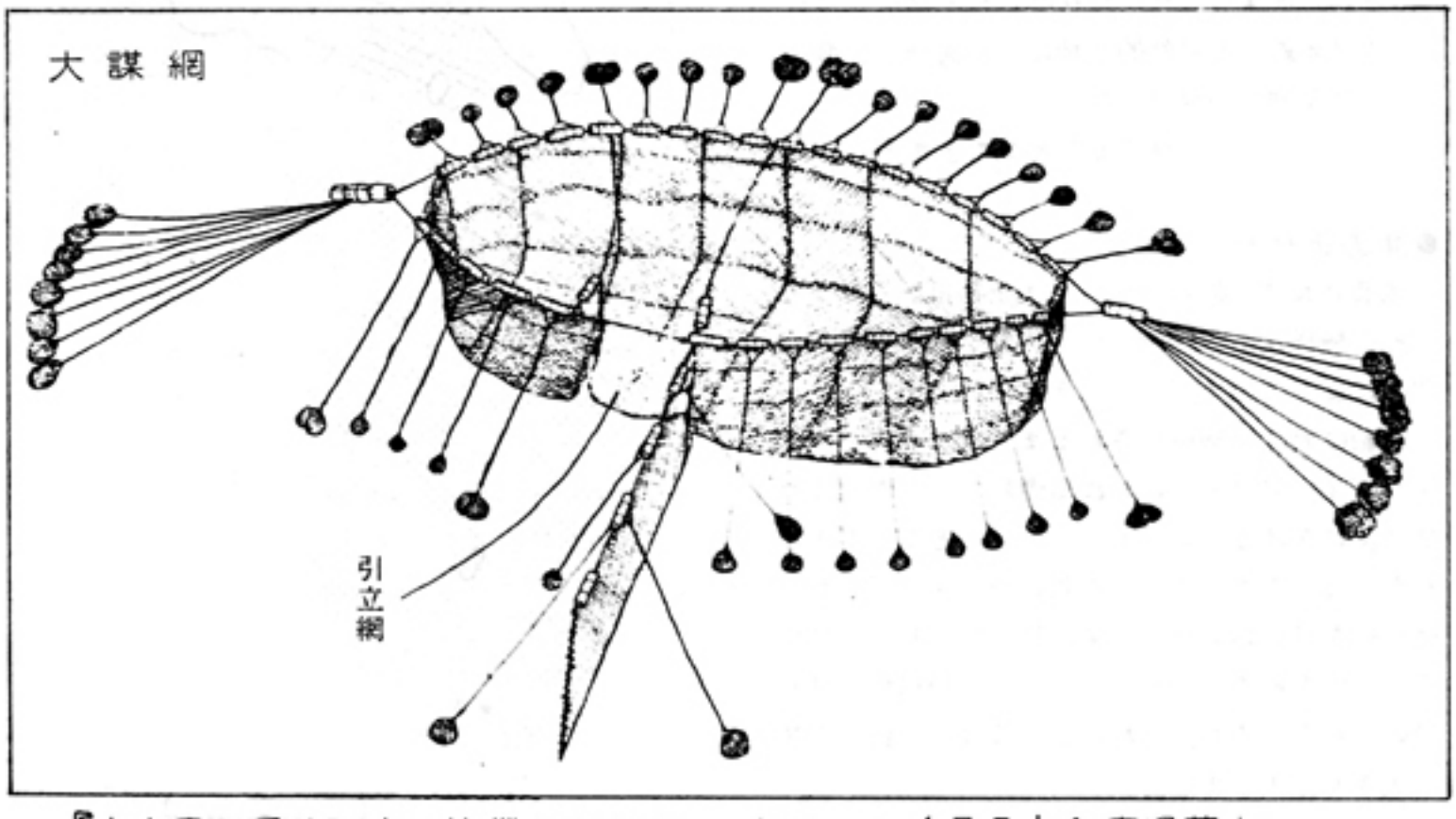
する、これができない場合は在来の、中でも地曳網を中心とする漁へと次第に分化していったのです。このように船の機械化は船のつくりを変えるというだけでなく、漁業のあり方そのものをも変えていくという程大きなことでありました。こうして須賀はカツオ釣と地曳網を中心とする漁村へとかわっていったのです。

漁の近代化ということであげなくてはならない事がもう１つあります。それは大正５年から始まった大謀網です。ブリシキ、ブリアミ、ブリ大謀網、オオシキなどと呼ばれ、ブリを対象魚とする定置網ですが、大敷網と大謀網が混同され、呼称からはそこに形式の変化があったのかどうかはわかりません。ただ、この網は在来の網漁に比べ規模が大きく、漁獲高も莫大なものでしたが、操業には大資本と大きな労働力を必要としました。具体的にあげれば、昭和８年の資料では、大謀網経営の資本は６８,８００円となっており、地曳網の３６５円に比べると約１９０倍もの資金がいることになります。また、労働力も昭和３年で１４５人、同４年で１５０人という具合で、地曳網に必要な人数が約１５人と比べると約１０倍もの労働力がいるわけです。

地曳網や手ぐり網、カツオ釣や小釣など在来の漁は、一戸の漁家を経営母体として行われたもので、家族や親族、さらに代々つづいた漁での家々の関係を労働力の給源としていたのに対し、この大謀網は巨大資本と大きな労働力を必要としたのです。そして、そこで労働を担う人々へは従来のシロワケ制という漁獲高に応じた報酬という制度でなく、日当・賃金といった労働の代価としての賃金制度になりました。大謀網に雇われればある程度の経済的裏付けが得られるようになりました。

大正初期に須賀に誰が初めて大謀網を張ったかはわかりませんが、昭和初期には漁業権をもつ須賀漁業組合と株・小田原魚市場の間で契約が結ばれ、小田原魚市場が大謀網を張りました。当時の様子を『神奈川県平塚市漁村経済調査書』（昭和８年）は「昨今主として地元の漁夫を使用する関係上、巾着網は勿論、其他小形発動機船も大謀網漁期中は漁夫を雇人れ出漁する状態にあり」と記してます。従来からの漁における労働組織が崩れ、漁の経営体制が変ってきていることがわかります。つまり、大謀網の導入は永々と続いた漁の伝統的経営体制に大きく影響し、新たなる体制をつくり出していったわけです。

（小川直之）



『古文書に見る二宮の漁業について』より　　イラスト：森田英之

はくぶつかん　ＶＯＬ４№７
〒２５４　平塚市浅間町１２－４１
ＴＥＬ　０４６３－３３－５１１１
印刷　平塚市総務部行政課文書係
通巻４３　発行　平塚市博物館